内田魯庵全集

6

# 随筆・評論 II

ゆまに書房

内田魯庵全集　第六巻

五二〇〇円

昭和五十九年十一月二十日　初版

著者　内田魯庵
編者　野村　喬
発行者　荒井秀夫
印刷所　第二整版印刷所
製本所　常川製本（株）
発行所　ゆまに書房

東京都千代田区内神田一―五―十一　セントラル大手町
電話（二九二〇七九八
振替　東京四―六三一六〇

# 内田魯庵全集第六巻／随筆・評論Ⅱ　目次

書籍趣味……九
精神界の異現象……一七
發賣禁止の根本問題……二三
文界時言……二八
人生に觸るるとは何ぞや……三三
女優論……三九
作品と事實との衝突に就いて……四四
性格描寫と事件……四八
トルストイ及『復活』著述始末……五三
『性格の描寫』に就いて……七二
人類の福利を増進する職業は高貴なり……七四
私だけの經驗は……七八

自殺について……八一
問はず語り……八六
忙中一閑錄……九八
文藝取締問題と藝術院……一〇九
三ケ目……一一三
裝釘より見たる書籍……一二四
馬場君の『繙譯批評の態度』……一二八
對客雜談……一三四
文士と造詣……一四六
『破垣』禁止當時の回想……一五二
讀書日札……一五七
四疊半文庫……一八〇
番茶ばなし……一九六
魯庵氏雜談……二〇三



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

昨日午前の日記……二〇七
原文の印象と譯文の趣致……二〇九
苦勞が足りない……二一六
四十二年文壇の回顧……二二一
厄落し……二二七
灰燼十萬卷……二三〇
要ある團體と要なき團體……二四八
VITA SEXUALIS……二五三
翻譯文と文章の進步發展……二六一
書齋生活……二六八
早稻田派論……三四九
杜翁の二大事業……三五二
文壇輓近の傾向……三五五
小說脚本を通じて觀たる現代社會……三六〇

平子鐸嶺君の事……三六九
新體文章と危險思想……三七二
自覺せよ若き女！……三七四
眞に文章を學ばんとする者に……三八七
文士遺族の扶助問題に就いて……三九五
新自然主義の聲……四〇〇
Oscar Wildeの"Vera"……四〇七
廣き意味に於けるヒュウマニチー……四一八
藝者論……四二二
性慾研究の必要を論ず……四三七
言ふ迄もなき事……四四八
婦人の自覺に就て……四五一
今年の文藝界に在つて書も印象の深かつた事……四五九
錦繪の國としての日本……四六二

年のくれ……四六九
醒めたる女……四七一
公開書一則……四七五
文明國には必ず智識ある高等遊民あり……四八七
デスクの上より……四八九
坪内君に賀の祝……五二七
讀書は遊戯である……五二九
萬年筆の過去、現在及び未來……五三五
賞金は長屋の引越し蕎麥……五四七
五拾錢銀貨一個……五四九
トルストイの話……五五四
廢娼論の不必要……五六七
杜翁大觀序……五七六
凡人非凡人序……五八二

一休禪師傳序……五八五
ステッキのカタログ序……五八八
女と惡魔の序……五九〇
解題……五九三
解説……五九九

# 随筆・評論Ⅱ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

# 書籍趣味

近來は大分書籍趣味が長じて來たやうだが、まだ〳〵西洋人に比べると日本人の書籍趣味が甚だ乏しい。

早い咄が世帶を持つと第一番に買うのが簞笥だ。九尺間口の裏店にも簞笥はゐる。ドンナ貧乏人でも簞笥があれば肩身が廣いが、書生上りのホヤ〳〵紳士の家庭と來ると較やともすると簞笥が無いので大いに面目玉を潰す。早速簞笥を買込む段取りとなる。

移轉(ひっこし)がある。荷を運び込む。簞笥が立派だと直ぐ近所の評判になつて羨ましがられるが簞笥が粗末だと忽ち安く見られる。『お隣りのお荷物は大層でムいます』とおさんが報告すると、『だつてお前、簞笥が前桐ぢやアないか、』と奥さんが直ぐ蔑しつける。日本人の家庭ぢやア簞笥が粗末だつたらカタキシざまは無い。簞笥が身代や身分の高下の唯一標準である。

從つて簞笥へ入れるもの卽ち衣類の趣味は中々長じてゐる。三越や白木のお客さんは必ずしも金持ちばかりぢやア無い。華族ばかりぢやア無い。隨分屋賃を滯らす連中でも三越では札びらを切つて見せる。香

物茶漬で夕飯を濟ましても錢湯へ行く時はゾロリとした。おかいこぐるみだ殊に婦人などゝ來たら縮緬の着物を着る爲めに生れて來たと思つてるやうだ。『三越へ買物に行く』といふのが女の無上の快樂でもあり見榮でもある。若し三越も白木も知らないなど云つたら夫こそ輕蔑されるどころか、テンデ人間扱ひを受けない。

之に反して本箱と來ると、殆んど門並無いと云つても好い。箪笥さへあれば本箱なんぞは無くても恥かしくも外聞が惡くも無い。中には本箱があると却て貧乏臭いと思ふものさへある。

從つて又書籍なんぞは無くても恥でも何でも無い。書籍は貧乏學者の商賣道具だから學者商賣をしないものは書籍なんぞは不必要である。生中の學問は却て家を亡ぼす基ひと先祖代々言ひつかつてるから、書物なんぞがあると碌な事は無い。一家の衰へる媒とさへ思つてる。

之が下等社會や素町人社會だけなら仕方が無いとするが、官吏とか技術家とか云ふ四角な字の少しは讀める連中の家にも本箱のあるのは甚だ乏しい。稀に書生時代の遺物の本箱があつても甚だ小ツぽけな桐（中には樅）の三本立か何かで、邪魔にされて戸棚の奥か物置の隅におし込んである。

殊に甚だしいのは帝國大學の學士卽ち日本の最高教育を受けた學士の家庭にも本箱の無いのは甚だ珍らしく無い。從つて書物は學校時代の教科書の外は持つておらぬ。教科書さへ失くしたものもある。ノートが製本してあるなどは奇特の分である。況してや私立大學や高等學校あたりの出身などは卒業して以來一冊の書籍を買うは魯か一行一頁さへ讀まないものがある。書籍などには全然歿交渉である。

斯ういふ人達は『本を讀むと馬鹿になる』といふ。『本ばかり讀んだつて役に立つものか』といふ。『俺は學者で無いから本を讀む必要は無い』といふ。

之が抑も根本の間違である。尤もコンナ人達は世渡り術以外に大切なものは無いと思つてゐるだらうが、世渡り術と書籍との關係は別として、抑も書籍は必ず讀むもの、讀んで利益を受くべきものと思ふのが大間違である。夫故、讀まなければ書籍は持つておらんでも可い、役に立たんやうな書籍なら讀まんでも可い、と斯ういふ結論になる。夫だから直接書籍と交渉しなくても濱む學者以外の人は書籍を買う必要もなければ持つてゐなければならぬわけも無い。隨つて書籍を買つたからツて面白くも無い。持つてゐたつて世渡りの足しにもならぬと堅くきめておる。

之は大變な間違である。書籍は必ずしも讀まなくてもいゝものだ。讀んで必ずしも役に立つものでは無い。之を蒐集し之を繙讀するは他の書畫骨董、乃至衣服なり道具なりに凝ると同樣の一種の趣味である。讀まなくても、讀んで役に立たなくても關はぬ、唯蒐集し襲藏しらへすれば好いのである。

然るに日本人は書物は必ず讀むべきもの、讀まなければ義理が濟まぬやうに思ふゆゑ、平生書籍に親まぬものは書物を買ふ必要は少しも感じない。最も書籍に親む學者社會でさへが書物を買ふばかりで讀まない人をツンドク先生などと嘲けつてる。併し乍ら西洋にも書籍を脊負つてるドンキーといふ同じ意味の諺があるが、之は書籍を集めて學者を衒ふ人を嘲けるのである。無論學者を衒ふのは書籍を集めると集めないとに關係せず感服しないが、書籍の蒐集夫れ自身が惡かるべき理由は決して無い。

世の中は總て實用一遍では無い。家屋は雨露を防ぐ爲めだから茅葺でもコケラでも瓦でもブリキでも乃至は天幕でも何でも關はぬといふわけには行かぬ。五尺の身體を容れる事が出來れば足ると云つたら物置でも濟む、鳥小屋でも澤山である。衣服は皮膚を蔽すが目的だと云つたら風呂敷を被つてゐても足りるわけである。況してや縕袍一貫あれば十分である。

併し乍ら衣食住萬端決してコンナ簡單な理由で滿足も出來なければ事實たしかに役に立たぬ。書籍とても矢張り其通り、唯役に立つものさへあれば澤山だと云つて法令全書とか紳士錄とか、ラムの所謂「書籍の形をしたる書籍に非ざる書籍」を備へるだけでは決して滿足出來んのが當然であるべき、筈なるに係らず、他の衣食住には必要以上の數寄をしながら、書籍に限つて讀まぬものや讀んでも役に立たぬものを買う必要は無い、之れ以上を買うはツンドク先生だといふは甚だ請取れぬ事である。

書籍は讀まなくても好い。讀まなくても隨分役に立つ事がある。小生の知人に、書籍は何にも持つておらぬ人だがいつでも自分の机の上に聖書と論語を飾つておく。其人は基督教信者でも何でも無い。夫から自分は怪んで聖書を讀むのかと聞いたら、讀まないのだ。聖書には何が書いてあるか丸きり知らないので、『實は斯うして聖書や論語を飾つておくと始終聖人に睨まれてゐるやうで妄念が起つても直ぐ抑へる事が出來る』と云つた。此人はドチラかと云ふと俗物だが、書籍を善用する道を知るものと云つべしである。

之に反して同じく小生の知人のある學者（といふほどでもないが學者を任じてる人）——此人は學者だ

から少しは本を持つてる。が、書籍は讀むべきものであるが、買うとツイ讀まぬから借りて讀むに限るときめておいて、賣つて儲かる見込のある堀出し物でも見當れば格別、左もなければ決して買はずにドンナ必要な書籍でも人から借りて讀む。此人が電車のまだ無い時分に遠方からわざ〳〵車に乘つて小生の許へ五十錢ばかりの或る新刊書を借りに來た。小生は呆れて了つて、『そりやア貸すのは何でも無いから貸しませうが、しかし君の家から爰まで來る往復の車賃があれば買へるぢやないか、』といふと、初めて氣が付いたやうに、『なる程爾うだつた』と云つた。ツマリ車賃を出すのは平氣だが書籍を買うのは惜しいのだと見える。平生最も書籍に親む人の中にも斯ういふのがある。

又或る國學者――と云ふほどでも無いが左も右くも國語を生命としてゐる人――は始終活版本ばかり買つておる。此人の說だと、活版書の方が簡便である、字が讀易い、西洋綴の方が躰裁が好い、版が鮮明である、といふ理由で活版本ばかりを所藏し、誤植に氣が付かんで飛んでも無い大間違ひをした愛敬咄もある。此人或る古本屋へ行てマジメ臭つて曰く、新らしい奇麗な活版本が廉くて古い汚ない木版本が高いのはドウいふ理由だと。之にはサスガの古本屋のおやぢも恐縮したさうである。

讀書子ですら此通りだから普通人が書籍を買はぬのは無理も無いが、ツマリ書籍は讀まなければならぬ、讀んで役に立つものでなければならぬといふ書籍の功利的方面ばかりを見て書籍奇物の趣味を理解せぬからであらう。

一と口に書籍といふが、書籍に種々ある。日本だけを見ても五山版と云ひ叡山本と云ひ慶長の活字本と

云ひ嵯峨本と云ひ將た金平本と云ひ奥淨瑠璃と云ひ黄表紙と云ひ蒟蒻本と云ひ、各々特異の版式があつて讀まないでも見たばかりで面白い。又寫本となると、古寫經は勿論慶長以前足利時代の寫本には細密なる摸樣畫の表紙などありて俗に碎いて云へば美術的のものが澤山ある。金平本以下の畫本になると、畫樣の古雅なる實に掬すべき味ひがある。學者でなくとも多少書畫骨董を愛する人ならば黄趣味は誰にでも理解出來る。

西洋の書物になると更に〳〵趣味が深い。大きさから云つても日本の豆本よりもズツト小さい郵便切手よりも小さなのから四五尺にも達する大きさのもある。表裝から云つても金屬の表紙もある。木の表紙もある。金屬に彫刻を施こしたのもある。極端な例をいふと人間の皮で作つた表紙の本がある。（之は世界に唯つた一部だけであるが）。

又日本の寫經と略ぼ同一の趣きのあるのは卽ち中古のマニスクリプトで、其粧飾文字の如き現に今日デコレーションの摸範と稱されてをるものすらある。其着彩鮮麗巧緻、光彩陸離たるもので、本文の羅甸文が一向解らぬ我々でさへ屢々レプロダクションに接する度に一見して垂涎千丈である。

元來歐米人は日本人よりも一層の槐集癖がある。日本人の骨董道樂の如き唯無暗に何の主義も考もなく集めるだけであるが、歐米人のは頗る科學的である。研究的である。夫故槐集癖のある普通人から時とすれば科學上の新說が出る事がある。況してや書籍の槐集に到つては他の品類の槐集よりも更に一層研究的である。純然たる小ライブラリヤンである。日本で本職のライブラリヤンすら輙やもすると書庫の番人と



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook